

FAMILY

VOL. 406

Feature

August 2022

ファミリーの顔が見える、声が響き合う
～会員発のイシュー&トピックに出会う場所



TRADITION

未来へつづく彩り
「Outdoor」

ようこそ、ファミリーの声が 響き合うラウンジへ

FUJITSUファミリー会は、会員の皆さんに交流の場を提供しています。会報Familyもその1つ。直接お会いする機会が減っているからこそ、この場をたくさんの意見やニュースが集まる、そして会員同士が学び合うコミュニティラウンジにしたい。そこで、今号より、各支部の最旬情報をお届けする「BranChannel (ブランチャチャンネル)」を発信します。さっそく、会員の声がクロスオーバーする、会員だけの特別なラウンジ、オープンします。

Contents 会報Family VOL.406

- 3 LS研総合発表会 2022
- 7 新プログラム「ミラトラ」体験レポート
～パーパス・カービングの実践から、変革への道筋が見えてくる～
- 10 Futures' Literacy 未来を読み解く
深刻化・多様化するエネルギー問題の解決へ
創る、蓄える、循環させる、エネルギーの未来技術
- 14 #わが社のパーパス
自然の恵みと叢の力に由来する日本独自の酒造文化で
世界を、“Wa”でいっぱい。
三和酒類株式会社様
- 17 Family's Information
- 18 BranChannel
 - 18 From 関東支部：若手幹事会キックオフ！
若い世代の斬新な発想とワイガヤパワーを活かして、
ファミリー会改革に挑戦
 - 20 From 中国支部：株式会社サタケ様
「ミラトラトライアル」の成果を中国支部全体に広げていきたい
～「ミラトラ」先行体験で従業員間の相互理解を深める～
 - 22 From 沖縄支部：金秀グループ様
沖縄型SDGsの実践事例を発信！
～金秀グループの女性社長に聞く、女性活躍推進の秘訣～





LS研究委員会

LS研総合発表会2022

2022年5月17日、LS研総合発表会が開催されました。残念ながら、3年連続で新型コロナウイルス感染症の影響により、例年実施していた集合形式を変更し、今年は発表者と代表者のみ会場にお越しいただき、発表をオンラインライブ配信する形で開催されました。

本イベントは、LS研活動の柱である「研究分科会」活動の1年間の成果を会員企業の皆様や有識者の方々と情報共有の場として開催し、会員各社における課題解決や新技術適用に向けたヒントなどにお役立ていただいています。

今回は、2021年度に活動した12の研究分科会が多彩な成果発表を行いました。



LS研究委員会幹事長ご挨拶

三菱ケミカルシステム株式会社
大道 尚彦 氏

2021年度も新型コロナウイルス感染症の拡大に振り回された1年でしたが、そのような中、当年においては、オンラインを中心とした活動を前提に参加メンバーを募り活動を開始し、ほとんどの方が本日の成果発表まで直接会うことなく活動を進めてこられました。

実際に会うことの叶わない約10名で「研究」を進めていくということは、当初考えていたよりも困難の連続だったかと思います。1年を振り返り、達成感、充実感などはいかがでしたでしょうか。

コロナ禍で自社の業務も多忙になる中、メンバー同士工夫をして助け合いながら、ここまでよく研究活動を継続してくださったことに、心より敬意を表します。

まさに、LS研の精神である「Give & Take」「Challenging Innovation」を体現していただけたものと感じております

し、そしてこの研究活動で得た研究成果・経験・知見・仲間たちを、ぜひご自身の業務や人生の幅を広げるために、余すことなく使っていただければと思っております。

LS研究委員会は本来、リアルな異業種交流の場です。当初のイメージとのギャップを感じ、また物足りない思いをされた具体的な場面もあったかと思います。こればかりは、皆様の安全を慮り、苦渋の決断をせざるを得なかったことに尽きます。ご容赦いただければ幸いです。

さて、この総合発表会はLS研の中でも最も大規模で、最も華やかなイベントです。過去2回は、この会場に主役の研究分科会メンバーがいない状態で執り行いましたが、誰もががハッピーな状態とは言えませんでした。

今年度は、少しでも晴れやかでかつ臨場感のある総合

発表会に近づけるため、何度となく幹事の皆様と相談した結果、ここに12の研究分科会の代表者をお呼びすることとなりました。

ご視聴中の皆様、本日の発表内容は、研究分科会参加メンバーがLS研会員にとっての有用性・先見性を追い求めた結果であります。各社における業務課題・経営課題の解決への一助になりますれば幸いです。

最後に、本研究分科会活動に大事な部下を託してくださった上司の皆様、技術的な側面から支援くださった総勢24名のテクニカルアドバイザーの皆様、また研鑽の場をご提供くださった富士通様にも、心からの感謝を申し上げます。

今後とも皆様方の積極的なご参加をお願いしまして、私の挨拶とさせていただきます。

研究成果審査 受賞分科会

LS研幹事および富士通社内企画委員により、研究成果の審査を実施しました。「成果の先見性」「成果の有用性」「研究の掘り下げ」などの評価項目をもとに、最優秀研究賞1編、優秀研究賞3編が選出されました。(昨年新設された「独創的研究賞」は、該当なし)
 この他に、当日の発表内容を評価する「発表賞」3編が選ばれました。


最優秀研究賞

Leading-edge Systems
最優秀研究賞
ハイブリッド/マルチクラウドに向けたシステム構成の設計と選択指針に関する研究(クラス2)



※P.5で研究内容を詳しくご紹介しています▶


優秀研究賞

Leading-edge Systems
優秀研究賞
テレワークにおけるコミュニケーションを中心とした働き方の研究(クラス1)

研究概要 テレワークではICTツールを介したコミュニケーションが欠かせない。当分科会はチームのコミュニケーションと効果性に影響を与えるチームの心理的安全性に着目した。ICTツールを介したコミュニケーション下の心理的安全性を損なう課題を整理し、その課題を解消するICTツールを活用した施策をまとめた。
 この施策の効果を検証し、コミュニケーションシーンごとに有効だと思われる施策を「3週間でチームの心理的安全性を向上させる提言書」として作成した。




優秀研究賞

Leading-edge Systems
優秀研究賞
ハイブリッド/マルチクラウドに向けたシステム構成の設計と選択指針に関する研究(クラス1)

研究概要 オンプレ・クラウドの選択指針を解明することを目的として、IPAの非機能要求グレードをベースに、システムの要求する非機能要件を選択することで、オンプレ・クラウドの適正評価をレーダーチャートで可視化するツールを作成した。また、ツールを利用するにあたっての注意事項や評価結果の見方、オンプレ・クラウド導入の業界傾向や過去事例などをガイドラインとしてまとめた。




優秀研究賞

Leading-edge Systems
優秀研究賞
テレワークにおけるシステム運用業務のあり方の研究(クラス2)

研究概要 テレワークは新型コロナウイルス感染症の拡大への対応策として普及したが、システム運用については文面のみでの意思疎通を余儀なくされる点やオンライン会議におけるコミュニケーションの難化から問い合わせ対応・障害対応に課題があることを明らかにした。
 上記の課題に対応し、テレワーク時でも出社時と変わらない作業時間・作業効率でのシステム運用を目的に、問い合わせフォームと障害対応ガイドラインを作成し、検証を実施することで、有効性を確認した。





Leading-edge Systems

最優秀研究賞



ハイブリッド/マルチクラウドに向けたシステム構成の設計と選択指針に関する研究 (クラス2)

研究概要

1. 研究の背景／課題／問題

企業のクラウド移行は2021年現在も増加傾向にあり、中小・中堅企業だけでなく大企業でも多くなっている。クラウド移行にはハイブリッドクラウドとマルチクラウド等、製品やクラウド化する箇所でも構成パターンは無数にあり、クラウド化の選択肢が幅広い。ただ選択肢が多いため、担当者に深いクラウド知識がないと最適なシステム構成の策定が難しい。現在、クラウド知識が少ない場合もシステム構成の策定を助けるガイドラインやマニュアルは多岐にわたり存在するが、システム設計指針は抽象的なものが多く、具体的な指針を提唱しているものは少ない。

2. 研究アプローチ

前述の課題を受けて、クラウド知識の浅い場合でも、最適なクラウドシステム構成の策定を容易にするため、以下研究プロセスを進める。

- (1) ハイブリッドクラウドとマルチクラウドの構成案をサンプルで策定する。
- (2) 構成案を評価するための評価軸を策定し、(1)で策定した構成案を実際に評価する。
- (3) 算出した評価結果に関して、分析や検証を行う。

実際に、サンプルでシステム構成案を策定、評価の決定までをシミュレーションとして行うことで、最適な構成案の策定手順や評価方法を研究する。そして、その策定手順や評価方法を別のサンプル事例でも試行することで妥当性を証明する。また、クラウド化する研究対象のシステムとして、大企業でよく使われるデータウェアハウス (DWH) を選定した。

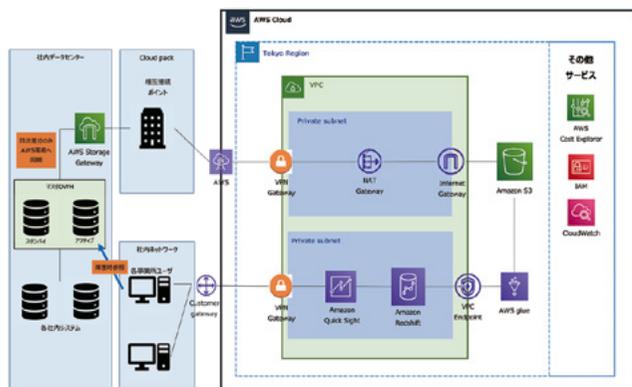
3. 研究内容／研究成果

ハイブリッドクラウドを2案、マルチクラウドを1案サンプルのシステム構成案として策定した。

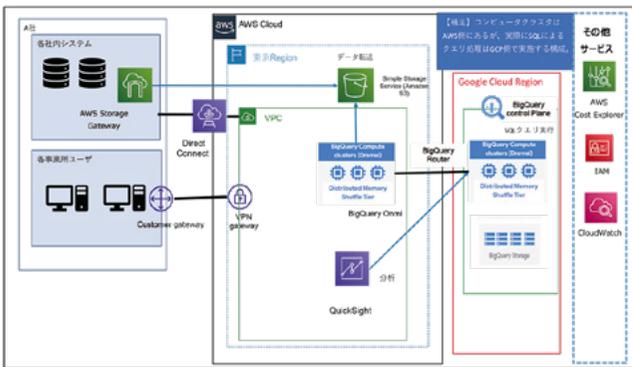
研究の結果、大企業がクラウド移行する際の策定手順は以下が最適であると考えた。

- ① 1つのクラウドベンダーを利用したすべてクラウドのシステム構成を検討。
- ② オンプレミス環境の方が適している部分がある場合や、クラウド化できない部分がある場合は、ハイブリッドクラウド構成を検討。
- ③ 機能別に見てより自社のニーズにマッチした他のクラウドサービスがあった場合は、そのサービスに置き換えてマルチクラウド構成を検討。

ハイブリッドクラウド構成案



マルチクラウド構成案



代表者コメント

率直にこの一年間は、研究会で議論、宿題で各自研究、次の研究会で宿題の発表の繰り返しで大変でした。ただメンバー全員が議論や研究の手を抜かずに論文を書ききり、成果も出すことができうれしいです。本研究の成果が今後の研究会の一助になれば幸いです。研究をご支援いただいた事務局、TAの皆様、メンバーの方々本当にありがとうございました。

みずほリサーチ&
テクノロジー株式会社
水野 凌作氏





第1会場 ゼロトラストにおける 企業セキュリティの在り方に関する研究

研究概要 急速に変化する社会や環境への対応や高度なサイバー攻撃への対策に合わせて、ITサービスの多様化が求められる昨今では、従来の境界型セキュリティ対策では不十分とされ、すべてのネットワークを信用しないという考え方に基づいた「ゼロトラストセキュリティ」に注目が集まってきている。

本研究では企業が求めるゼロトラストモデルの理想像を確立し、各構成要素の導入優先順序を明らかにすることで、企業のゼロトラスト導入推進の材料とすることを目的とした。



第2会場 SDGs経営を見据えた ICTの活用に関する研究

研究概要 企業はSDGs活動をいかに組織全体に浸透させるかが求められているが、どのようにICTを活用し、どの17のゴールや169のターゲットを目指せば良いか不明確である。

SDGsにおけるICT活用事例を調査・収集・再編することで、自社で活用できるICTからSDGsターゲットを判別できると考えた。本研究では、SDGsとICTの関連性を明確化する事例集、および定量的・定性的な分析結果としてICTが活用されやすい分野と業界をまとめた。



第3会場 テレワークにおけるコミュニケーションを 中心とした働き方の研究(クラス2)

研究概要 チームの生産性に最も関係の深い心理的安全性がテレワークにおいて低下しており、「相談のしやすさ」が最も課題になっていること、「感情を伝えづらいこと」が主原因であることを明らかにした。原因分析の結果を踏まえ、心理的安全性の向上策としてテレワーク下でも簡易に「感情を伝える」手法を立案した。有効性を確認できたことから、チームのコミュニケーションや生産性で課題のある企業においては、ぜひ実践していただきたい。



総評

LS研運営部会長
株式会社トヨタシステムズ
大平 宏氏

成果報告書の審査は2段階で行われ、審査員は、私たち幹事と富士通の社内企画委員です。一次審査でまず8編に絞り、二次審査で上位4編を入賞としました。審査は研究結果の有用性・先見性を追求しているかに主眼を置き、良い課題設定をしているか、またその課題をどのように深掘りして正当性を明らかにしているかを評価します。さらに論文としての構成や読みやすさなどを加味します。

今年度の論文で多かったパターンは、自らの仮説に基づきガイドラインのような成果物を作成し、その有用性をアンケートで測る、というものでした。しかしアンケートでは有用性は測れても仮説の正しさを証明したことにはなりません。昨年からの傾向はあったのですが、今年度は特にこのパターンが多く見られました。

論文は本来、課題設定があり、仮説があり、それを裏付ける検証を通して、これまでにない知見を導き出してゆくものです。成果物として

のガイドラインの使い方やシーンの説明に終始し、その中身がどのような検証過程を経て生み出されたものなのか、といった肝心な点がきちんと説明されていないようでは、制作記事のように見えてしまいます。テレワーク化で、広い視野や新しい着眼点を得ること、また自ら手を動かして正しさを証明することが難しかったのかもしれません。

このあたりは、何も研究分科会メンバーだけの問題であると申し上げるつもりはなく、研究活動をサポートする我々を含めたステークホルダーも、ねじを巻き直す必要のある課題と捉えています。2022年度はこの課題に取り組むべく、可能な限りリアルに会って討論する機会を増やし、幹事や企画委員の関与も深めてゆく所存です。

最後になりますが、ご参加されました皆様には、この経験をぜひとも今後の活動に活かしていただきたいと思います。



ミ/ラ/ト/ラ/体験レポート

～パーパス・カービングの実践から、
変革への道筋が見えてくる～

富士通では、DX（デジタル・トランスフォーメーション）推進のためのツールとして、グループ全体で「パーパス・カービング」を実践しています。カービングは「彫刻」を意味しており、パーパス・カービングとは、まさに自身の心の中から自己のパーパス、すなわち働く意義や生きる目的などを彫り出していく対話型のプログラムです。

従業員1人ひとりが導き出した個人のパーパスを、会社のパーパスと掛け合わせることで、多様な合力（同時に働く2つ以上の力を合成した力）が生み出され、変革への原動力となります（図1）。富士通では、このパーパス・カービングを、時田社長はじめ経営陣も含めた全社員が体験しています。

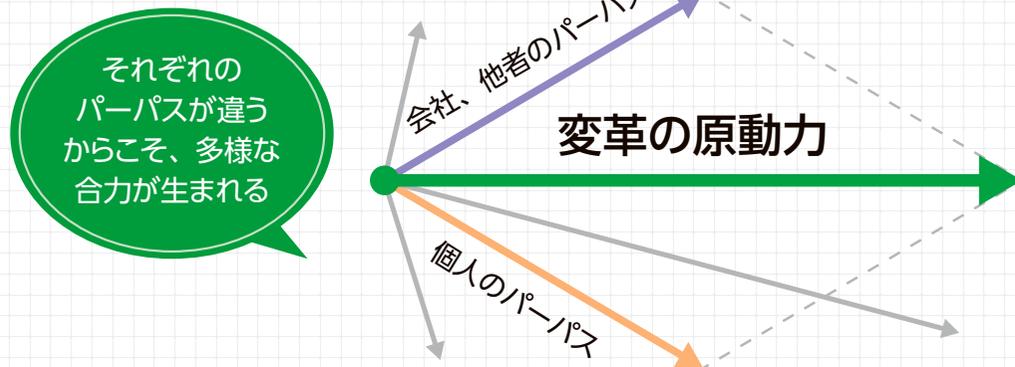


図1)パーパス・カービングのコンセプト

ファミリー会では、コロナ禍でオンラインでの活動が中心となる中、これまでとは違う形で、会員様同士が交流する場を設けたいと考えてきました。特に経営層が、自らの悩みを共有、相談できる場を実現できないかということで、総会の開催とあわせて、ファミリー会員の皆様に「パーパス・カービング」をベースに構成した、「ミラトラ」[自分 (me) と未来をトランスフォームすることを、みんなで一緒にトライする!との意味を込めた造語]と名付けたプログラムをご体験いただきました。

このミラトラは、各企業におけるDXの推進者が、自身の内面から自社の課題解決方法を学ぶ、デジタルビジネス推進リーダーのための対話型プログラムです。参加者同士のパーパスを起点とした対話を通じ「自社のビジネスにパーパスをどう活かせるか」ビジネス起点でのアイデアを共有いただくもので、今年度会員の皆様にも展開予定です。

今回のご体験では、用意されたテーマをもとに、対話を楽しみながら、共通する課題やその解決策を見つけ出すことで、参加者同士のつながりを生むことを目的に交流いただきました。当日は、久々の対面形式による交流の場となったこともあり、和気藹々とした雰囲気のもと、活発な対話が交わされました。オンライン開催を含む、全3回のプログラムの模様を紹介します。

ミラトラプログラムは、
3回に分けて実施しました

第1回 2022/5/13

online
第2回 2022/5/24

online
第3回 2022/6/8

第1回 講演 Purpose Carving (パーパスを掘り起こし言語化する)

- 日時/2022年5月13日(金) 14:20～17:00
- 会場/帝国ホテル東京(総会とあわせて開催)



プログラム第1回では、ナレッジネットワーク株式会社の森戸裕一氏を講師にお迎えし、「Well-Beingを実現するDX組織構築の考え方」と題した講演をお聞きいただきました。

講演では、急速なデジタルシフトによって社会に大きな構造変化が生じていることが実例とともに語られ、もはや「IT化による業務効率の向上」というフェーズを終え、「DXによるWell-Beingの実現」とい

う新たなフェーズを迎えているとの認識が示されました。

また、「裕福」を目指していた社会から「幸福」を目指す社会への転換が進む中で、人々の幸福を最大化するためには、1人ひとりが「自分は何のために生きるのか/働くのか」という目的意識を明確にする「パーパス」が重要だと語られました。

さらに、デジタルによる業務変革(DX)を、未来志向経営による会社組織全体の



変革(コーポレート・トランスフォーメーション: CX)につなげていく必要性など、今後の企業戦略への示唆やヒントに満ちた講演に、役員の皆様は熱心に耳を傾けていました。

続いて行われた「パーパス・カービング」では、過去～今、大切にしているもの(価値観)、価値観につながる体験など、自身が「夢中になったこと」「やり遂げたこと、乗

り越えたこと」など、根本的に自分がどうなのか、原点に戻って見つめ直し、自分自身の内側に持つパーパスを明確にしていくワークを、グループに分かれてご体験いただきました。

ワークの最後には、参加者同士による「言葉のギフト」の交換が行われ、温かい雰囲気の中で「お互いを深く知る」という交流が生まれました。

パーパス・カービング

グループに分かれ、テーブルごとに
行われた相互インタビュー



講演 / Well-Beingを実現する DX組織構築の考え方

ナレッジネットワーク株式会社
森戸 裕一 氏

デジタル化による組織や地域の変革支援が得意分野。内閣官房より、全国でわずか5名の「シェアリングエコノミー伝道師」に任命され、自治体と連携した地方創生支援やデジタルトランスフォーメーションの推進を軸にした全国の企業人材育成・経営指導実績をさらに重ね、専門分野の幅を広げている。



第2回

Purpose Dialogue
(パーパスを共感する)

- 日時：2022年5月24日(火)
14:00～16:00
- 会場：オンライン開催
- 講師：株式会社富士通ラーニングメディア

第3回

アイデアづくり

- 日時：2022年6月8日(水)
14:00～16:00
- 会場：オンライン開催
- 講師：株式会社富士通ラーニングメディア

会場をオンラインに移して開催された第2回では、第1回で明確にしたご自身のパーパスを、前回とは異なるグループで共有し、互いに共感いただく「Purpose Dialogue」を行いました。

グループワークでは、事前におまもいただいた内容をもとに、参加者1人ひとりが「何を大切にしているのか」「なぜ、それを大切にしているのか」を、ご自身の仕事や生活と結びつけながらお披露目い

ただきました。話し手にとっては、人前で自身のパーパスを発信することがマインドセットの機会となり、聞き手にとっては、他の方のパーパスを知ることが大きな刺激になったようです。

グループワーク後の振り返りでは、「社内や仕事相手との普段の対話では出てこない話題が多く、非常に刺激になった」といった声が聞かれるなど、貴重な体験になったとご評価いただきました。



プログラムの最終段階では、「自社のビジネスにパーパスをどう活かせるか」を念頭に置き、社会課題をテーマに解決に向けたアイデアを共有しました。また、企業としての競争力を維持・強化しながら、社会・環境への貢献を実現する経営の在り方について意見交換を行いました。

オンラインによるワークショップでは、まず、参加者それぞれが意識する社会課題について発表し、その中からグループで深堀りしたいテーマを決めて、ディスカッションを行いました。こうした対話を通じて、社会課題をテーマに組織の変革

や新たな価値創出を導くアイデアやヒントを得ていただくとともに、同じ課題意識を持った方同士が、今後のファミリー会を通じて課題解決策を見つけ出すつながりが生まれることも期待しています。

ワークショップ後は、各グループの対話による成果を、参加者全員に向けて発表していただきました。環境危機やフードロス、人口減少社会への対応など、多様な社会課題をテーマに、解決に向けた考え方やアプローチが披露され、それらに対する意見交換も行われるなど、意義深い交流の場となりました。

「パーパス」と「大切にしているもの」

<p>ITに携わる人たちのステータスを向上させる。 公正・信頼・健康</p>  <p>佐藤会長</p>	<p>多様な価値観を持つ仲間を引き合わせ、お互いの引き出しを増やすことで、一人ひとりがウェルビーイングである世界を創りたい。 多様性・人間性・楽しさ</p>  <p>大川理事</p>	<p>自分の経験、体験を後輩につなげ、さらなる改革につなげる。 愛情・健康・フォローシップ</p>  <p>中野理事</p>
<p>いつもユーモアのセンスを忘れずに、様々な特性をお互いにリスペクトして、それらの融合を先導し、気持ちいいものを創造する。 リーダーシップ・多様性・ユーモア</p>  <p>関西支部 有司支部長</p>	<p>人々の心を豊かで活力のあるものにするために自らを高めながら、価値ある情報を提言する。 楽しさ・成長・好奇心</p>  <p>東海支部 風間支部長</p>	<p>IT技術で地域社会を盛り上げる。 人との繋がり・前向きな考え・直感</p>  <p>四国支部 石元支部長</p>

参加理事より



日本通運株式会社
IT推進部
大林 孝至 氏

自身のパーパスという、大切だけれども、今まであまり深く考えてこなかったことを考える貴重な機会をいただき、新たな気づきを得ることができました。いくつかのキーワードの中から自分の大切にしている価値観を選び、過去の体験を振り返りつづ言語化することで、自分自身の考え方を整理できています。

普段はどうしても業務中心の対話になりがちなので、業務以外のテーマについて深く考え、言語化し、それらをもとに他企業の方々と話し合うことは新鮮な経験でした。また機会があれば、メンバーを変えて体験してみたいですね。

深刻化・多様化するエネルギー問題の解決へ 創る、蓄える、循環させる、 エネルギーの未来技術

近年、地球規模の課題となっているエネルギー問題は、業界や規模を問わず、あらゆる企業にとって重要なテーマ。限りある化石資源に頼った現状から脱却を図り、持続可能な発展を実現するために、創エネ、蓄エネ、省エネの各分野で新たなエネルギー技術への挑戦が続けられている。今回は、これら「エネルギーの未来技術」の中から、次代の主役として期待される先進テクノロジーを紹介しよう。

「未来への警鐘」にはとどまらない、 エネルギー問題は喫緊の社会課題

世界各地で豪雨や猛暑といった異常気象が相次ぐ中、その要因として温室効果ガスの排出量増加による気温上昇が指摘されている。温室効果ガスの削減は、国や企業単体の努力だけでなし得るものでなく、人類すべてが手を取り合って取り組むべき課題である。そこで、削減に向けた国際的な枠組みとして、2015年に開催されたCOP21において「世界的な平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃以下に保つとともに、1.5℃に抑えるよう努力する(2℃目標)」を掲げた「パリ協定」が採択された。

こうした国際的な潮流を受けて、日本政府は2020年10月、2050年までに「カーボンニュートラル」を目指すことを宣言した。カーボンニュートラルとは、二酸化炭素(CO₂)をはじめとした温室効果ガスの排出量から、森林などによる吸収量を差し引き、合計を実質的ゼロにすること(図1参照)。その実現に向けて、各分野で脱炭素の動きが広がっているが、中でも重要

なのがエネルギー分野での取り組みだ。日本のエネルギー(発電量)比率は、約8割までが石油や石炭、天然ガスなど化石燃料による火力発電に占められていて、温室効果ガスの主要な排出源となっている(図2参照)。産業や生活に欠かせない電力の安定供給を維持しながら脱炭素を実現するために、CO₂を排出しない新たなエネルギー技術の確立が急がれている。

エネルギーを取り巻く課題は「脱炭素」だけではない。ウクライナ侵攻を機に、ロシア産化石燃料の輸入を禁止する動きが世界各国に広がっている。資源大国であるロシアにとって痛手であると同時に、輸入国にとっても資源価格の高騰や供給不足などマイナス影響が生じており、エネルギーの安全保障に対する危機感が強まっている。特に、日本はエネルギー自給率が約12%(2018年度)とG7で最も低く、輸入に依存している化石燃料の逼迫・値上がりは、産業や暮らしに深刻な影響をもたらしつつある。ウクライナ問題に限らず、今後の国際状況の変化に際しても、安定したエネルギー供給を維持するために、国内で調達可能な新たなエネルギーの開発が期待されている。

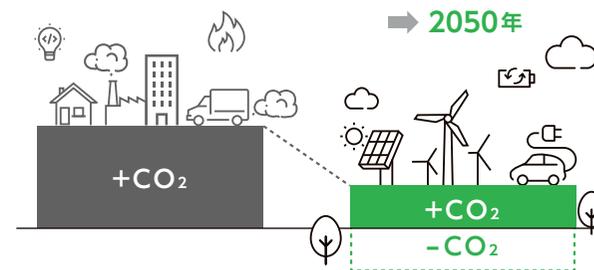


図1)カーボンニュートラルとは

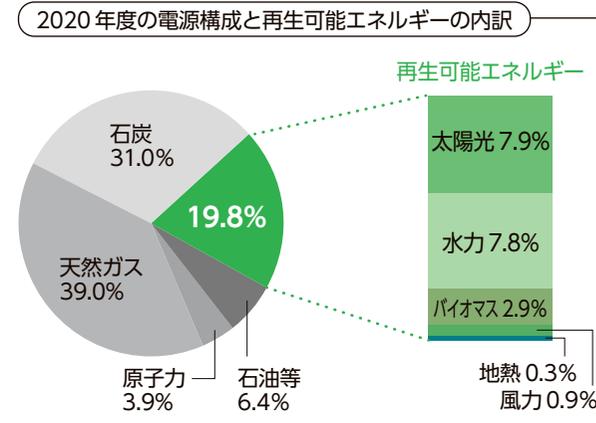


図2)日本の電源構成(2020年度)
※出典:資源エネルギー庁総合エネルギー統計(2020年度)

クリーン&グリーンな 新エネルギー創出への挑戦

脱炭素社会の実現に向けて、CO₂を排出しない新たなエネルギー創出に向けた挑戦が広がっている。本命視されているものから意外なものまで、注目のトピックを紹介しよう。

1) 「水素社会」への期待が高まる水素エネルギー

利用時にCO₂を排出しないことから、次世代エネルギーの柱として期待されているのが水素エネルギーだ。水素エネルギーを社会のいたるところで利用する「水素社会」の実現に向けて、日本政府は2017年に「水素基本戦略」を策定し、水素の低コスト化や水素サプライチェーンの構築、産業利用の拡大といった方針のもと、産学官が一丸となって様々な取り組みを推進している(図3参照)。

水素エネルギーの具体的な利用法として、まず挙げ

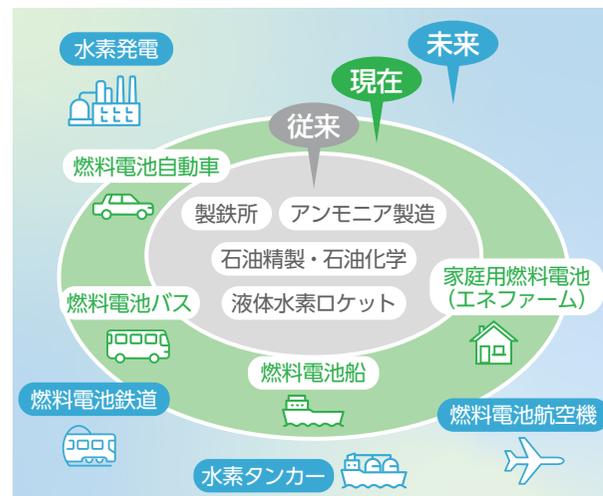


図3) 水素社会に向けた水素利用シーンの拡大

られるのが燃料電池だ。「電池」という言葉から、電気を貯めておく装置と誤解されがちだが、実際は水素をエネルギー源とした発電装置である。その仕組みは、理科の実験で学んだこともある「電気分解」とは逆に、水素と酸素の化学反応によって水を作る過程で生じる電気や熱を利用するものだ(図4参照)。

一部で実用化が始まっている燃料電池自動車(FCV)は、燃料電池から得られた電気エネルギーでモーターを回して走行し、ガソリンスタンドの代わりに水素ステーションから水素を供給する仕組みだ。また、家庭用燃料電池として普及している「エネファーム」は、都市ガスやLPガスから取り出した水素を、大気中の酸素

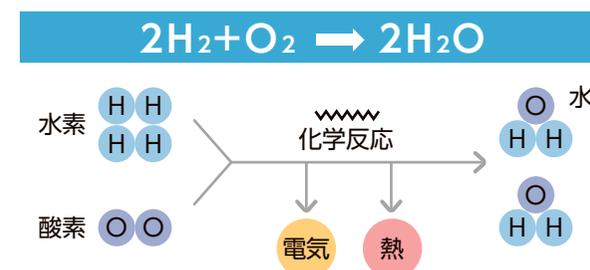


図4) 燃料電池の仕組み



水素ステーション

と反応させて発電。同時に発生する熱も給湯などに利用する仕組みで、高い省エネ効果が期待されている。

水素エネルギーのもう1つの特徴が、調達方法の多様さだ。現在、流通している水素の大半は石油や天然ガスなど化石燃料から生成したもののだが、メタノールやエタノールなどの化学品、さらには下水汚泥や廃プラスチックなどからも生成できる。また、製鉄所や化学プラントなどでも副産物として水素が生じており、脱炭素だけでなくエネルギー自給率の向上という面でも期待されている。

水素社会の実現に向けて急ピッチで進められているのが、利用時だけでなく、生産時にもCO₂を排出しない、真の意味でCO₂フリーな水素を量産すること。現在の主流である化石燃料由来の水素は、主成分であるメタンを熱して水素と二酸化炭素に分解(CH₄+O₂→2H₂+CO₂)するもので、環境的にはグレーであることから「グレー水素」と呼ばれている。これに対し、同じ化石燃料由来でも、CCS(CO₂回収・貯留技術)などを駆使してCO₂を大気中に排出せずに作られた水素は「ブルー水素」、水を電気分解して製造する水素はそもそもCO₂を生み出さないことから「グリーン水素」と呼ばれる。もちろん、電気分解するためにも電力が必要だが、そこに太陽光発電など再生可能エネルギーを利用すれば、温室効果ガスを一切、排出することなく水素を供給できるため、最も理想的な水素製造法とされている。

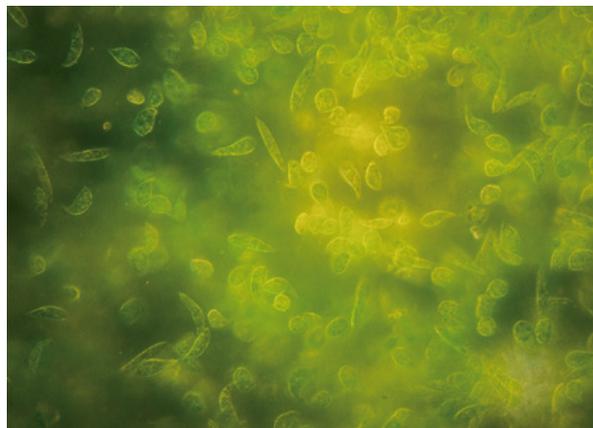
ブルー水素やグリーン水素は、グレー水素に比べて製造コストがかかることが課題だったが、近年の技術革新や用途拡大によって、大幅なコストダウンが期待されている。関連技術を持つ企業にとっては、大きなビジネスチャンスとなるだろう。

2) 「ミドリムシが燃料に？」 期待が高まるバイオマス燃料

自然の力を活用する再生可能エネルギーの中でも、動植物由来の有機物を利用したバイオマスエネルギーへの注目が高まっている。バイオマス資源も燃焼時にCO₂を排出するが、原料となる植物が成長時に光合成によってCO₂を吸収するため、トータルで見れば相殺されてゼロになり、カーボンニュートラルなエネルギーとして世界的に普及が拡大しつつある。

バイオマス資源は栽培により継続的に調達できるので、化石資源のように枯渇する心配がない。また、木材の端材や間伐材、家畜の糞尿なども活用でき、廃棄物の減少・リサイクルにもつながる。さらには風力や太陽光のように自然環境に左右されないなど、多くのメリットがある一方で、課題もある。1つは、大量に供給するには手間やコストがかかること。もう1つは食料との競合だ。バイオマス資源の中にはトウモロコシやサトウキビ、大豆など食料として利用されるものが少なくない。これらをエネルギー資源に利用すれば、必然的に食料の供給量は減少する。世界的な食料不足が懸念される中、食料と競合しないバイオマス資源の開発が課題となっている。

そこで注目されているのが、微細藻類の一種であるミドリムシ（学名：ユーグレナ）を原料としたバイオディーゼル燃料だ。「ミドリムシが燃料に？」と驚かれるかもしれないが、ミドリムシは農地を用いずに安定生産が可能であり、面積当たりの収穫油量も極めて大きい。近年の研究開発によって、軽油などとの混合燃料ではなく100%バイオディーゼル燃料としての利用も可能になるなど、今後の利用拡大が期待されている。



微細藻類をディーゼル燃料・ジェット燃料の原料に

3) 次世代太陽電池の主役 「ペロブスカイト型太陽電池」

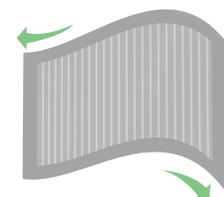
再生可能エネルギーの中でも、早くから実用化が進んできた太陽光発電。2021年には環境省が「2030年度に太陽光発電の導入目標を約2,000万kW分（原子力発電所20基分に相当）積み増す」と発表するなど、さらなる普及拡大が見込まれているが、国内の発電量全体に占める比率は約8%（2020年度）にとどまっているのが現状だ。

その背景には、平地が少ない日本では大規模な太陽光発電設備の設置が難しいという事情がある。現在、太陽電池材料の95%を占めるシリコン半導体は、太陽光を吸収するために一定の厚さを必要とし、薄くして曲げたり、軽量化したりが困難なため設置場所が制限される。太陽光発電を飛躍的に拡大させるには、「設置容易性」という課題をクリアした次世代太陽電池の開発が不可欠であり、その本命として脚光を浴びているのが「ペロブスカイト太陽電池」だ。

ペロブスカイトは、ロシアで発見された鉱物資源だが、一般的な化学物質からも合成できる。ペロブスカイトを素材とした半導体は太陽光の吸収係数が高いため、シリコン半導体に比べて薄型化が可能。軽量でフレキシブルなフィルムタイプの太陽電池が実現すれば、社会のいたるところに設置でき、身の回りで消費する電力すべてを太陽光でまかなう時代も夢ではなくなっている。

さらに特筆すべきは、このペロブスカイト太陽電池を最初に提案したのは日本の科学者だということ。日本発の次世代エネルギー技術として、覚えておきたいキーワードと言える。

ペロブスカイト太陽電池の特長



フィルム型モジュールのイメージ

- 軽い ■ 薄い
- フレキシブル ▶ 曲げられる
- ローラブル ▶ 巻ける
- シースルー ▶ 透明にできる
- 変換効率が高い
- 製造コストが低い
- 設置場所を選ばない

創エネだけでなく蓄エネ、省エネにも新たな動きが

エネルギーに関する社会課題を解決するためには、創エネだけでなく、蓄エネ、省エネの分野でも技術革新が求められる。それぞれ最前線の動きを紹介しよう。

1) リチウムイオン電池に代わる次世代電池 「全固体電池」

発電で生じた電力を、身の回りで効率的に利用するためには、電気を蓄える電池が必要になる。電池の分類法は様々で、形状や用途、業界によっても用語が異なるが、まず理解しておきたいのが、使い切りの「一次電池」と、繰り返し充電・放電が可能な「二次電池」という分類だ。

二次電池には、乾電池、自動車やスマホに搭載されるバッテリー、産業用など大型の蓄電池まで様々な形状があるが、いずれも原理的には変わらない。活物質が電解質を通して正極と負極の間を移動することで、電気の流れを生み出している。活物質には様々な素材が利用されているが、近年、主流となっているのがリチウムイオン電池だ。リチウムイオン電池はエネルギー密度が高く、小型・軽量化が容易で長時間の使用が可能、繰り返し充電しても劣化しにくいなど多くのメリットがある一方で、電解質に有機溶剤を用いているため、液漏れによる発火・爆発の危険性がある。

近年、注目を集めている「全固体電池」は、その名の通り、電解質も含めて、すべて固体で構成された電池のこと。液漏れの心配がないうえに、固体電解質自体が両極を絶縁するセパレータの役割を果たすため、形状の自由度が高まり、薄型にしたり、層状に重ねたりと、

さらなる小型大容量化が可能だ(図5参照)。

「電解質は液体」という常識を覆した全固定電池の登場により、電気自動車の安全性や航続可能距離がさらに高まるなど、脱炭素社会の実現への貢献が期待されている。

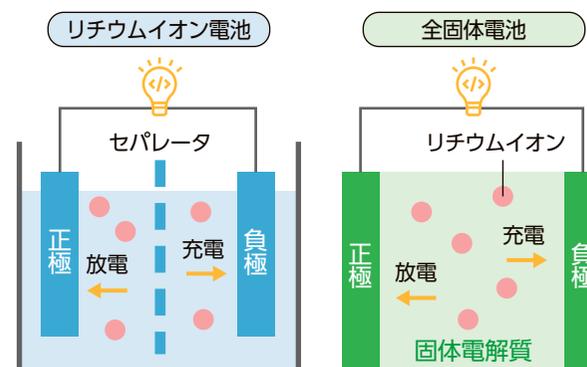


図5) リチウムイオン電池と全固体電池の構造比較

2) 室温レベルの廃熱も有効利用！ 進化した廃熱電力変換技術

エネルギー資源に乏しい日本では、早くから省エネに対する取り組みが広がり、「省エネ先進国」として世界から認められる一方、近年ではその成果が頭打ちになりつつある。政府は「徹底した省エネルギー社会の実現」に向けて省エネ技術の研究開発を推進すべく、資源エネルギー庁と新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の連名による「省エネルギー技術戦略」を策定。環境変化や技術動向を踏まえて定期的に更新されており、2019年に新たな重要技術として加えられたのが「廃熱の高効率電力変換技術」だ。

産業現場や暮らしの中で生じる廃熱をエネルギーとして再利用できれば、大きな省エネ効果が期待できる

が、廃熱の多くは活用が難しい室温付近(100℃以下)であり、そのまま大気中に放出されている。近年では、温度差を利用して熱エネルギーを電気エネルギーに変換する「熱電発電」の研究が進み(図6参照)、室温付近の熱でも効率的に電気に変換できる「室温熱電材料」が開発され、廃熱利用の可能性が一挙に広がりつつある。例えば、IoT機器からの発熱を利用して工場内に電力を供給したり、エアコンなどの廃熱を利用して住まいに電力を供給したりと、自律型の電力供給システムが広がっていけば、社会全体の省エネ化が進展するはずだ。

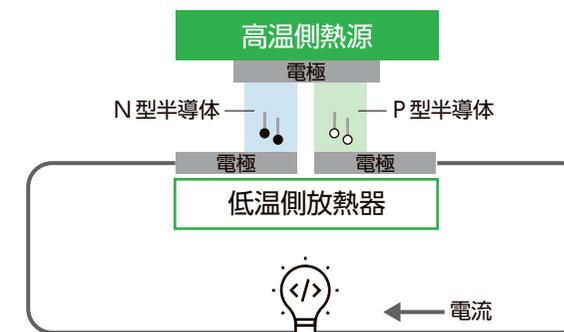


図6) 半導体を利用した熱電変換の仕組み

創エネ、蓄エネ、省エネの各分野で急速に進む次世代のエネルギー技術開発。これらをいち早く活用し、脱炭素の実現やエネルギー自給率向上を後押しすることは、産業社会の一員であるすべての企業にとって重要なテーマと言える。今後も最新情報を積極的にキャッチアップし、持続可能な社会づくりに貢献しながら、競争力の強化に役立ててもらいたい。

わが社の パーパス

自然の恵みと麴の力に由来する

日本独自の酒造文化で

世界を、“Wa”でいっぱい。

会員企業それぞれが重視するテーマについて

経営層やキーパーソンにインタビューするこのコーナー。

今回は「下町のナポレオン」の愛称でおなじみの本格麦焼酎「いいちこ」で

知られる大分の総合醸造企業、三和酒類株式会社様に、

近年、改めて掲げた「パーパス」について語っていただきました。

自分たちが社会に何を 提供すべきかを見つめ直して

——「いいちこ」で知られる三和酒類様ですが、焼酎だけでなく日本酒やワインなども幅広く手掛けているとお聞きました。

熊埜御堂 当社が本社を構える大分県宇佐市は、古くから酒造りが盛んな土地です。約65年前、この地の清酒の造り酒屋3社が共同瓶詰場を設置したのが当社の始まりで、「三和酒類」という社名には、和を大切にしながら、幅広い種類のお

酒を提案していこうという想いが込められています。あとから参加した1社を含め、4社の発酵・醸造技術を結集し、「和香牡丹」ブランドの日本酒を中心に米酢原料、「安心院ワイン」ブランドの果実酒などの製造にも挑戦してきました。そうした試行錯誤を重ねて、1979年に本格麦焼酎「いいちこ」が誕生したので、日本酒やワインの方が先発です。焼酎でも、地元産の大麦「ニシノホシ」を原料にした「西の星」も開発していますが、やはり「いいちこ」のブランドイメージが強力で、地元でも「株式会社いいちこ」という印象を持つ方もいるようです。「いいちこ」は当社が大切に育ててきたブランドですが、決してそれだけが当社の提供

する価値ではないはず。では、当社がお客様とともに作っていききたい価値観とは何なのか、改めて問い直した結果、2021年に策定したパーパスが「世界を、“Wa”でいっぱい。」です。

幡手 “Wa”には多くの意味を含んでいます。お酒を楽しむ「和」やかな時間。語り合い絆を深める「話」。人と人とのつながりを生む「輪」。故郷や環境を大切にする「環」。そしてワクワクした想いを表す「わっ!」。いずれも当社が事業を通じてお客様に提供したい価値を表しています。

熊埜御堂 こうした様々な“Wa”を世界中で生み出し、人々の暮らしを豊かで幸福なものにすることこそ、私たち三和酒類のパーパスだと考えています。



九州支部 三和酒類株式会社

代表取締役

くまのみどう やすあき
熊埜御堂 康昭 氏

執行役員

CCRN Design Center部長

はたで つよし
幡手 剛 氏



公式サイトで公開されている「世界を“Wa”でいっぱい。」コンセプトムービー

「いいちこ」ポスターに 込められた想い

——お酒そのものではなく、それらを通じて生み出される幸福感こそ、社会に提供したい価値だというわけですね。「いいちこ」の広告展開からも、そうした理念が伝わってくるように感じます。

熊埜御堂 「いいちこ」広告の原点は、現在も続く駅貼りポスターです。お陰様で「いいちこ」の認知度やイメージを高めるのはもちろん、お酒を飲まない方からも好評をいただいております。その成果を「iichiko design」としてまとめています。

幡手 広告を担当する私たちの部署名は、「Culture (文化)」「Craft (技能)」「Region (地域)」「Nature (自然)」という4つの概念を意味しています。これらを、ポスターやCMにも反映していますが、実際に制作しているのは東京のクリエイターの方々に、デザインやコピーについては素人が口を出すことではないと考え、基本的にすべてお任せ

しています。

熊埜御堂 初めて制作した1984年と言えば、まだ現在のように焼酎の価値が広く認められてなかった時代でしたので、焼酎のイメージを変えたい、「いいちこ」というお酒の魅力を伝えたいという、当社の願いだけをお伝えしました。

幡手 クリエイターに「いいちこ」を飲んでもらったところ、生まれたキーワードが「透明感」でした。加えて、失われつつある日本の原風景を大切にしたいという想いや、お酒を飲んだときのリラックスした気持ちなどを盛り込んでいただき、あの世界観が生まれたのです。

熊埜御堂 ポスターでもCMでも、お酒を飲むシーンや「おいしい」といった表現は一切使っていません。未成年に配慮したという面もありますが、「お酒は適量を飲んで、優しく酔うもの」という当社の考え方を反映しています。

日本が育んだ食文化の魅力を 広く発信していきたい

——認知度向上や、飲みやすさのおかげで、最近では「まずは焼酎ハイボール」といった飲み方も広がっていますが、造り手として提案したい飲み方はありますか？

熊埜御堂 麦焼酎を含めた本格焼酎の飲み方としては、素材本来の風味が楽しめるロックや水割り、お湯割りが「王道」と言われていましたが、それ以外は邪道だという発想はもともとありませんでし



上)1984年に初めて制作されたポスター
下)2022年6月のポスター

iichiko design)
<https://www.iichiko.co.jp/design/poster/>

た。特に、まだ焼酎に慣れていない方は、自分の好きなもので、好きな比率で割ってもらい、まずは焼酎に親しんでもらえればと思っています。

幡手 そもそも焼酎は麦や米、芋、ソバなど素材だけでも幅広い種類があり、水やお湯だけでなく炭酸飲料、お茶など、いろいろなもので割って楽しめる「多様性のあるお酒」。当社でも缶入り商品「いいちこ下町のハイボール」を発売したり、産地のお茶メーカーとのコラボでお茶割りを提案したりと、新しい飲み方を提案しています。

熊埜御堂 海外ではアルコール度数の高い蒸留酒は、食前酒や食後酒として楽しむものと思われがちですが、焼酎は食中酒としても楽しめ、しかも和食だけでなく洋食や中華にも合うため、海外でも人気広がりがつあります。今後も焼酎に限らず、日本が生んだ食文化を広く発信していきたいですね。

幡手 その一環として、麹技術を駆使した和のスピリッツ(蒸留酒)「WAPIRITS TUMUGI(つむぎ)」を開発し、日本発のカクテルベーススピリッツとして、これまで焼酎を扱っていなかったバー向けに提案するなど、新たな市場を開拓しています。

熊埜御堂 酒造りや、その原点となる麹技術は、日本の豊かな気候風土と先人たちの創意工夫によって育まれてきた貴重な文化です。この食文化を、多様な商品展開を通じて広く社会に届け、より多くの“Wa”を生み出すことが、私たちの存在意義だと考えています。

Company Profile

三和酒類株式会社

●所在地:

〒879-0495 大分県宇佐市大字山本2231番地の1

TEL.0978-32-1431(代)

<https://www.sanwa-shurui.co.jp/company/>

●創立: 1958年(昭和33年)9月5日

●資本金: 10億円

●職員数: 363名(2021年10月現在)

●事業内容: 酒類、清涼飲料水、食品原料素材の製造・販売

酒造りの現場にて、 造り手の想いを聞く

多彩な原酒を育む

いいちこ日田蒸留所 ●大分県日田市



江戸幕府直轄の「天領」として栄えた日田は、「水郷(すいきょう)」と呼ばれる水資源豊かな土地。この恵まれた環境のもと、緑との対

比が美しい赤レンガの蒸留所において、「いいちこ」の原酒を造っているのが日田蒸留所です。

現場見学で驚かされたのは、原料となる麦の品種や酵母の種類、蒸留方式、貯蔵方法などを変えることで、異なる特性を持った多彩な原酒が生まれていること。それらをブレンドすることで「いいちこ」の豊かな風味を創り出しています。「焼酎の魅力はもちろん、そうした焼酎造りの奥深さや、造り手のこだわりについてもお伝えしていきたいですね」との造り手の言葉が、強く印象に残っています。

これら2拠点に加え、2022年5月には、本社跡地をリニューアルして、酒造り体験や飲食を楽しむ施設「辛島 虚空乃蔵」をオープン。同社の原点である日本酒から初挑戦となる発泡酒まで、麹文化を楽しむ空間として注目を集めています。

今回の取材にあたり、同社の各施設を見学させていただいたので、その模様は本記事の続編として、FAMILY NEWSサイトにて掲載(8月公開予定)します。ぜひ、引き続きご覧ください。

三和酒類様では、日本が誇る伝統のお酒造りについて、より多くの人々に理解を深めていただけるよう、各製造拠点に見学コースを整備し、多くの見学者を受け入れています。今回の取材では、経営層へのインタビューに加え、こうした酒造りの現場で造り手の方々にお話を伺いました。

社の中のワイナリー

あじむ
安心院葡萄酒工房 ●大分県宇佐市



ブドウ栽培に適した気候を活かし、「西日本一のブドウ団地」をスローガンに拓かれた安心院盆地の一角に、緑に囲まれたワイナ

リーが誕生したのは2001年のこと。もともとは更地だった丘に植樹し、丹精込めて育てた森は、今や多くの鳥や虫が豊かな生態系を築いています。

そうした環境下で、原料となるブドウ造りからワイン醸造、貯蔵、試飲・販売まで一貫して行っている造り手からは「ワイン原料にできるブドウを収穫するまでには10年かかるもの。これからも安心院のテロワール(気候や風土・土壌など地域独自の環境を意味するフランス語)を大切にしながら、より良いワインを造り続けます」と力強い言葉が聞かれました。

プレゼント!

日田蒸留所限定いいちこオリジナルセットや安心院のスパークリングワインを3名の方にプレゼントします! 応募方法は、Web記事に掲載いたしますので、ぜひご覧ください

▶ <https://jp.fujitsu.com/family/familynews/fnews.html>



FUJITSUファミリー会をもっと楽しく活用していただくための様々な情報をご提供します。

PhotoContest デジタルフォトコンテスト 2022

会員参加
企画

大好評企画「デジタルフォトコンテスト」が、2年ぶりに復活しました!

デジタルカメラ、スマートフォンカメラ、どちらで撮影いただいても構いません。

お気に入りの1枚を、ぜひファミリー会の皆様にシェアしてください。応募作品はFAMILY NEWSサイトに掲載され、その中から入賞作品を選出します。皆様からのたくさんのご応募をお待ちしております。

おうち時間を楽しめる賞品をご用意しました

最優秀賞：1名



グルメギフト 5,000円相当

優秀賞：1名



グルメギフト 3,000円相当

映え賞：10名



Amazonギフト券 1,000円分



応募締切 | 2022年9月16日(金)

応募テーマ

『2022年、夏の思い出』

夏が戻ってきた2022年。皆様はどのような夏を過ごされますか? 家族や友人たちと過ごす夏に撮った、あなたのお気に入りの1枚を、会報誌で発表してみませんか。

- 応募資格** FUJITSUファミリー会の会員であれば、どなたでもご応募いただけます。
- 応募規定**
 - ・応募はお1人様何点でも可能です。
 - ・応募者ご本人が撮影された作品で、かつ、他のコンテスト等に応募されていない作品に限らせていただきます。
 - ・画像ファイル形式はJPEG、サイズは5MB未満とさせていただきます。
- 審査・発表** 応募作品の中から、会報Family編集委員が審査を行います。入賞作品はFAMILY NEWSサイト(10月公開予定)で発表いたします。

■応募上の注意事項

- ・著作権は応募者(撮影者)、使用权はFUJITSUファミリー会とさせていただきます。
- ・被写体が肖像権を有する場合は、応募者側で権利関係を処理いただいたうえでご応募ください。

応募方法

<https://jp.fujitsu.com/family/photocontest/>
ファミリー会ホームページ「デジタルフォトコンテスト作品募集!!!」投稿フォームよりご応募ください。スマホからも応募できます。



※本コンテストはFUJITSUファミリー会による提供です。本コンテストについてのお問い合わせはAmazonではお受けしておりません。

FUJITSUファミリー会事務局【<https://jp.fujitsu.com/family/>】までお願いいたします。
※AmazonおよびそれらのロゴはAmazon.com, Inc. またはその関連会社の商標です。

NEW FAMILY

(4~6月度ご入会分)

■北海道

(株) 富士通ラーニングメディア

■東北

(株) 富士通ラーニングメディア

■関東

(株) 荏原製作所

(株) 廣瀬商会

(株) FCN

西松建設(株)

合同会社K&Lコンサルティング

■北陸

(株) スギノマシン

(株) JECC

■東海

静岡県建設産業国民健康保険組合

東海労働金庫

ナカシャクリエイト(株)

■関西

(株) みなと銀行

(株) GSユアサ

京都府商工会連合会

■中国

テンパール工業(株)

■四国

(株) ヨンキユウ

(株) 井関物流

■九州

(株) 富士通ラーニングメディア

長崎県国民健康保険団体連合会

(株) 大東システムエンジニアリング

■沖縄

医療法人南嶺会 勝連病院



若手幹事会キックオフ！

若い世代の斬新な発想とワイガヤパワーを活かして、ファミリー会改革に挑戦

関東支部では、若い世代の会員による「若手幹事会」を発足し、キックオフミーティングを開催。若手視点での「ファミリー会をもっと盛り上げる」活動がスタートしました。関東支部幹事として若手幹事会のメンターを担当される内野さんに、この新しい取り組みへの期待をお聞きました。

Overview

FUJITSUファミリー会関東支部 若手幹事会

若い世代の意見を取り入れ次代のファミリー会を創造することを目指して、会員企業の若手社員によるワーキンググループを発足。2022年度は12月の幹事会でのプレゼン向け、新規セミナー・新規施策の企画立案に取り組み、本年度中の実施を目指しています。



7名の2022年度メンバー(メンバー構成は次ページで紹介)

●若い世代の意見を活かし、 次代のファミリー会を創る

この度、関東支部若手幹事会が、第一歩を踏み出しました。従来のFUJITSUファミリー会の運営にはなかった若い世代の視点、発想、意見を取り入れて、ファミリー会が抱える課題を解決し、ありたい姿を次代へつないでいく、「初」の取り組みです。

若手幹事会発足の背景には、ここ数年、ファミリー会を退会される企業が徐々に増えているという危機感があります。退会の理由は様々ですが、中にはファミリー会の行事に一度も参加されないまま、魅力を感じられないという理由で辞められるケースもあり、「どのようにファミリー会の魅力を伝えるか、有効に活用してもらうか」は、幹事会の懸案となっていました。

懸念の1つが、経営者や幹部社員が多い幹事会が企画・運営するだけでは、次代を担う若い人には魅力が伝わらないのではないか、ということです。逆に考えれば、若い感性で若い人が魅力を感じる施策を考えて、やってみて、それが刺激となりファミリー会の活動が活性化すれば、会員減少を食い止めるだけでなく、増やしていくこともできるのではないかと。幹事会の総意で、若手の力を借りてファミリー会の改革に挑戦することを決めました。



FUJITSUファミリー会関東支部 幹事
三菱地所ITソリューションズ株式会社
経営企画部 シニアエキスパート
内野 守氏

●ファミリー会を人と人、 人と情報をつなぐ体験の場に

これまで、会員企業の若手社員はセミナーやイベントに参加することはあっても、会員同士の交流に関しては積極的でなかったと感じます。ファミリー会本来の役割を考えると、イベントはきっかけにすぎず、情報や学びを得るのはもちろん、そこで出会う社外の、特に異業種の方々と交流を持ち人脈を広げることこそが、貴重な体験価値だと言えるでしょう。これを逃すのは実にもったいない。

そこで、今年度は7名のメンバーによるワーキンググループを立ち上げ、まずは自分たちが、そして同世代の会員が楽しめるセミナーやイベントプロモーションを企画してもらい、実施したいと考えています。その中で、メンバー自身がファミリー会のファンになり、コミュニティの核として周囲の人を巻き込み、ファンの輪が広がっていくことを期待しています。また、この若手幹事会自体が1つのイベントであるという意味では、メンバー同士大いに意見を出し合っ、議論を楽しみながら親交を深めてほしいと思います。1年間の交流を楽しんで、その先も親しい仲間としてつながっていただけたら大成功です。

加えて、この活動が全国の各支部に波及し、FUJITSUファミリー会というコミュニティが未永く持続し、発展していくことを願っています。支部を越えて会員同士の付き合いが広がり、例えば秋季大会のような総会で、全国の若手会員が集う姿を見られたらうれしいですね。

私たちがファーストペンギンになります! 若手幹事メンバー集合

2022年度メンバーの初顔合わせとなる第1回若手幹事会が開催されました。様々な業種の会社から招集された7人のメンバーは、人事、広報、システム開発、運用・保守など、職種も業務内容も様々。始めは緊張感があったものの、自己紹介、アイスブレイクとプログラムが進むうちに場も温まり、和やかな空気の中、ハマっている趣味の話（釣り、映画、コンサートなど）を中心に会話が弾みました。初対面の人と打ち解けるにはオ



FUJITSU ファミリー会関東支部

メール contact-family-kanto@cs.jp.fujitsu.com

フラインが相応しいと改めて納得したところで、一行は施設見学へ。

当日会場となった施設（JR川崎タワー F3rd-X: 富士通サテライトオフィス）は、2021年に開設されたばかりの最新設備を備えたワークスペース。今後、若手幹事会はこのスペースを拠点として利用したり、互いの会社を行き来したりして活動を進めていきます。7つの個性が融合した先に、どんな企画が提案されるのか。期待が高まります。

お子さまと一緒に楽しむなら

「横浜みなとみらい北側地区」

みなとみらいの周辺は、観覧車、赤レンガ倉庫、ランドマークタワーがある南側にこれまで人が集まっていたが、最近北側（横浜駅寄り）に、子どもが楽しめるスポットがたくさんできています。特に、乗り物好き、メカ好きの子ども（と大人）がわくわくできるスポットがあるので、お近くにお越しの際は、ぜひ、足をのばしてみてください。



Post

初回ミーティングを終えたメンバーに抱負を投稿してもらいました ※50音順 敬称略



明治安田システム・テクノロジー株式会社
一戸 亮祐

私は「若手」というには業務経験年数が長く、他のメンバーとの年齢差を心配していましたが、思ったよりもギャップがなくて安心しました。「若手らしい発想」と「適度な緩さ」を意識しながら、課題に取り組んでいきたいと思っています。



三菱地所ITソリューションズ株式会社
加藤 明範

同年代の方と意見交換を行うことで、自身の成長にもつながる取り組みだと感じています。施策ありきではなく、ディスカッションを重ねてファミリー会の「あるべき姿」を追求し、達成するための施策は何かを検討・実現していきたいと思っています。



MS&ADシステムズ株式会社
川口 健夫

今回、対面で皆さんと話し、目標を共有できてよかったです。オンライン研修やセミナーは業務の合間に参加しやすい反面、参加者同士の交流が少ないデメリットも。参加者がもっと交流できるようなイベントを企画したいと思っています。



株式会社ベル・インフォ・テック
小杉 朝香

これからの活動を通じて、皆さんと日々の仕事等についても相談できる仲になっていければと思います。「若手」として参加するからには、今までにない視点からのアイデアでファミリー会に新しい風を吹かせていきたいと思っています。



株式会社ワイ・シー・シー
奈良 実佳

メンバーの皆さんはやる気にあふれていて、とてもいい刺激になりました。まだ具体的な構想はないのですが、まずは多くの方にファミリー会を広め、有効活用できる場であることをアピールしていきたいです。



FITEC株式会社
村上 勢菜

今回、ファミリー会の活動について改めて知ることができたので、今後の活動のモチベーションが上がりました！ファミリー会について、もっと多くの人に知っていただけるような、新たな取り組みにチャレンジしたいです。



株式会社ジェイエスピー
吉原 優衣

和やかな雰囲気の中でお話しできて、これからの活動が楽しみになりました。ファミリー会の活動を何かしら活性化できるよう前向きな検討をしたいと思います。その中で、少しずつ皆さんのことも知れたらと思います。



「ミラトラトライアル」の成果を中国支部全体に広げていきたい ～「ミラトラ」先行体験で従業員間の相互理解を深める～

中国支部長・松本和久氏が社長を務める株式会社サタケ様では、ファミリー会が2022年度に展開予定の対話型プログラム「ミラトラ」（詳細はP7～9のレポートを参照）を一足早く体験する「ミラトラトライアル」を実施しました。その狙いや実際に体験した感想などを、中国支部の活動方針と照らしてお伺いしました。

●ファミリー会の付加価値を高めるツールの1つとして「ミラトラ」に注目

——まずは松本社長にお伺いします。今回の「ミラトラトライアル」は、中国支部全体にどのように役立てたいとの想いから実施されたのでしょうか。

松本 2022年度の活動テーマに「価値ある存在になるために、会員のつながりを増やすために」を掲げています。既存の会員間の連携を活性化するとともに、新しい仲間を増やしていくためには、ファミリー会がより有意義なものになるよう、付加価値を高めていく必要があります。そこで重視する価値が「情報交流」と「人財育成」の2つであり、これらに寄与する新たな取り組みがないか、常にアンテナを張っていました。

——そのアンテナに今回、「ミラトラ」が引っかかったというわけですね。

松本 「ミラトラ」は富士通がDX推進のためのツールとして実践されている、デジタルビジネス推進リーダーのための対話型プログラム。当社も「サタケDX (S-DX)」と

FUJITSUファミリー会 中国支部長
株式会社サタケ 代表取締役社長
松本 和久氏



して独自のデジタル改革を推進中ですので、関心を寄せていたところ、ファミリー会事務局から先行体験を打診され、喜んで実施することにしました。

——「ミラトラ」を体験するにあたり、どのような課題解決に役立つと期待されましたか？

松本 当社は食品産業総合機械メーカーとしての価値創造力を高めるため、開発、製造、エンジニアリング、営業、管理といった部門間の風通しを重視しています。「ミラトラ」はパーパス・カービングという手法で、参加者1人ひとりが自身の内面を見つめ直し、自身の働く意義や目的を互いに発表し合うもの。このプログラムを通して、従業員同士の相互理解が部門を越えて深まっていくことに期待しました。

●従業員同士が互いのパーパスや、その背景を理解することで深まる連携

——実際に「ミラトラトライアル」に参加されるにあたり、どのような期待を持たれていましたか？

高瀬 私は先ほど社長が言ったS-DXの推進役でもあり、

Profile

株式会社サタケ

幼少期から“神童”と呼ばれた佐竹利市氏が1896年（明治29年）に日本初の動力式精米機を開発して創業。人力による精米作業からの解放は、全国の農業従事者のみならず日本酒業界にも大きな影響を与えました。二代目・利彦氏は近代精米技術を理論的に確立し東京大学より博士号を取得する一方、趣味で始めたヤシの研究で世界的権威に。その娘である利子氏のパートナーとして三代目を継いだ覚氏は豊富な海外経験を活かしてグローバル企業に発展させ、

四代目となった利子氏は女性ならではの視点でGABAライスなど機能性食品分野にも事業を拡大。才能豊かな経営者に恵まれ、125年以上の歴史を持つ「食品産業総合機械メーカー」に発展しています。



社内ヤシ園

社内のヤシ園や資料室には、利彦氏が発見した新種のヤシや、収集した世界的にも希少なサンプルが

日本初の動力式精米機



サタケの最新機器



全社各部門を取りまとめるべく、各部門のトップに情報システムの活用実態などをヒアリングしてきました。今回、「ミラトラ」という新しい取り組みを通じて、もっと内面まで踏み込んで意見や考え方を汲み取り、私がデジタル化戦略に落とし込むことができれば、情報システムの未来を導くためのヒントが得られると期待しました。

下中 それはお互い様で、私たちにとっても従来、あまり知る機会がなかった情報システム部門の考え方を知る良い機会になりました。今回、高瀬課長はじめ情報システム部門のメンバーの意見を聞いたことで、もっと相談していいんだと感じた一方で、改善の大変さを理解しないといけないなと感じました。

金川 はじめは「パーパス」といってもピンとこない面もありましたが、その背景にある経験や考え方も含めて発表し合うことで、相手の内面まで理解が深まり、今後の業務に良い影響があると期待しました。最近では、コロナ禍で飲みニケーションの機会も少なくなったため、組織としての一体感を高める機会になったと思います。

——実際にプログラムを体験してみて、どのような気付きが得られましたか。

下中 対話を通じて個々のパーパスを見つめ直す「インタビューシート」や、パーパスを起点に変革のアイデアを可視化する「コンセプトシート」などを活用しましたが、普段、意識していなかった自身の内面を掘り起こす良いツールだと感じました。エンジニアリング部門はメンバーの多くが現場にいて、かつコロナ禍で顔を合わせる機会が減った現在、メンバーとのWeb会議を積極的に行っているところですが、その際にもこれらシートを活用しています。

金川 あまり接点のなかった従業員同士はもちろん、普段から接している従業員同士でも、新しい気付きがありましたね。例えば、高瀬課長とはDXについて日頃から打ち合わせを重ねていて、メーカー系SE会社からの転職だと聞いていましたが、改めて前職で培われた知見や

経験、人脈などを知り、今後のシステム改善に活かそうだと感じました。

高瀬 高瀬といえば〇〇だという代名詞を創り、それを知ってもらうことも大切だと感じました。

下中 当社は近年、価値創造力を高めるため、各部門で中途入社の人材が増えているので、そうした人材を有効活用できるよう、このプログラムを活用して、1人ひとりが蓄積してきた体験やノウハウ、人脈などをしっかり把握していきたいですね。

●一度きりの体験にとどまらず、「ミラトラ」の成果を拡げていきたい

——今回の体験を踏まえて、今後の展開はどのようにお考えでしょう。

下中 振り返ってみると、こんなことも話せばよかったということもあるし、この人の話も聞いてみたいという気持ちもあり、ぜひ、継続していきたいですね。今回は経営層と主要部門のトップ+若手という人選でしたが、次回からはメンバーを入れ替えてみるのも面白いと思います。

金川 社内だけでなく、他社の方々と一緒にやってみてくださいね。エンジニアリング部門は多様な業界の方々と連携する必要があるため、異業種の方との対話から得られるものは多いと思います。

高瀬 他社との共同開催は面白そうですね。他社の情報システム部門の方とミラトラを開催できれば、DX推進のためのヒントが得られそうです。ファミリー会を通じて実現できればと期待しています。

松本 「ミラトラトライアル」から様々な成果が得られたようで何よりでした。部門間の距離が近くなるとともに、私自身にとっても従業員の想いを理解する良い機会となりました。今回の成果を広く発信し、ぜひ、中国支部の会員企業にも体験してもらいたいと思います。

里山の魅力を発信する「とよさか 豊栄くらす」地域交流拠点

サタケが本社を置く東広島市西条からほど近い豊栄町は、里山の豊かな自然に恵まれながらも過疎化・高齢化が進んでいました。この地域の再生・活性化を目指す「豊栄プロジェクト」の一貫として、地元の企業や学生、住民らが一丸となり、ワークショップ形式によって古民家を再生した「豊栄くらす」が2017年にオープン。里山の魅力を伝える情報発信、地元の野菜や特産品などの販売、地元食材を活かした料理が楽しめるレストランを備える地域交流拠点として、同じ課題を持つ全国各地の注目を集めています。



古民家の風情を活かした外観



地域の食材を活かした季節ごとのお料理

Interviewee



取締役 常務執行役員
エンジニアリング本部
本部長
下中 裕司 氏



エンジニアリング本部
副本部長
金川 浩司 氏



経営本部
情報システム部
課長
高瀬 健一 氏

FUJITSU ファミリー会中国支部

Tel 082-207-0310 (直通)

メール contact-family-chugoku@cs.fujitsu.com



沖縄型SDGsの実践事例を発信！

～金秀グループの女性社長に聞く、女性活躍推進の秘訣～

沖縄支部では、沖縄型SDGsへの取り組みを強化するとともに、その実践事例を全国に発信しています。中でも近年、注力しているのがSDGsの目標5「ジェンダー平等を実現しよう」につながる女性活躍推進です。その牽引役として活躍されている金秀興産株式会社の砂川様にお伺いしました。

Profile

金秀グループ

まだ戦災の傷跡も生々しい1947年（昭和22年）、弱冠19歳の呉屋秀信氏が立ち上げた小さな鉄工所は、沖縄の人々の生活を支えるべく奮闘を続け、沖縄の復興とともに業容を拡大。創業75周年を経た現在では、金秀ホールディングスのもと14社1事業協同組合、従業員約5,000人を擁する沖縄有数の企業グループへと成長しています。

創業以来の鉄工業をはじめ、建設、流通、観光、不動産、バイオなど多様な事業を展開する同グループは、自らを「多様な企業の集合体」と位置づけ、来る100周年に向けたグループ長期ビジョンに「多様性の力で沖縄を豊かに、世界を幸せに」を掲げています。



創業者・呉屋秀信氏



わずか3人で始めた鉄工所がグループの起源

●女性経営者のルーツは、 金秀グループ創業者の「奉仕の精神」

——現在、社長として経営の舵取りを担われている砂川様ですが、いつ頃から経営者を目指されたのでしょうか。

砂川 もともと事務員として入社したので、経営に関わることは想像もしてなかったですね（笑）。きっかけとなったのは、グループ創業者である先代会長の秘書に配属されたこと。経営者と身近に接するうちに、自然と企業経営を意識するようになったのかもかもしれません。それ以上に影響を受けたのが、創業者の「尽されて忘れず」という人間性でした。

——創業者である呉屋秀信氏の精神は、今も「誠実、努力、奉仕」という社訓に受け継がれています。

砂川 戦後間もない沖縄の人々に対し「自分に何ができるか」を考え、始めは畑を耕すのに必要な農具を提供し、生活できるようになるとインフラ整備のための建設業へ、さらには暮らしを豊かにするための小売・流通業へと、沖縄の復興に合わせて業容を拡大してきました。地元・沖縄への貢献に強い使命感を持ち、頼まれれば損得抜きで引き受けるという創業者の姿勢から、多くのことを学びました。

——会社として女性活躍推進に注力されるようになったのは、いつ頃からでしょうか。

砂川 最初のきっかけは、現会長（呉屋守将氏）が二代目を継いだ90年代後半、「女性社員だけ制服を着させるのは男女平等ではない」と言って、女性社員の制服を

廃止したことでした。まだ周囲の意識がそこまで進んでなく、当の女性社員からも批判的な反応でしたが、早くから経営トップが確固たる意志を示したことが、その後の女性活躍推進につながったと感じています。

●女性管理職20%を目標に掲げ、 わずか3年で達成

——そうした理念のもとに社内の意識改革が進む中、2013年には経営目標の1つに女性管理職比率20%を目指す「W20」を掲げます。

砂川 当時、従業員の男女比率は8:2でしたが、女性の管理職は10%に満たないほど。「管理職の比率も8:2になってこそ、初めて男女が同じスタートラインに立ったと言える」という会長の言葉を受けて、女性社員への教育や意識高揚に努めました。その結果、3年後には目標を達成でき、現在は新たな目標として、創業80周年である2027年を目途に女性役員比率30%を目指しています。

——わずか3年という短期間で目標を達成できた秘訣をお聞かせください。

砂川 私が役員を務めていた金秀商事では、食品スー

金秀興産株式会社
代表取締役社長
砂川 久美子氏



2022年度秋季大会のお知らせ

3年ぶりに対面での開催となる2022年度の秋季大会は、11月17～18日に沖縄での開催が決定しました。会場は那覇市内から約10キロ、宜野湾市の美しいビーチ沿いにある「沖縄コンベンションセンター」を予定しています。詳細は後日改めてご案内しますが、沖縄ならではの各種イベントを計画していますので、ぜひ、ご参加ください。



沖縄コンベンションセンター

FUJITSU ファミリー会沖縄支部

Tel 092-411-6554 (直通)

メール contact-family-okinawa@cs.jp.fujitsu.com

パーを経営するだけあって従業員の女性比率は高いものの、女性店長は60店舗で1人だけ。これを20名までは増やそうと働きかけたのですが、自分から手を挙げる女性社員は皆無でした。というのも、女性はレジ係など接客担当、男性は品出しや発注など運営担当と、男女で役割が明確に分かれていたのです。店長を務めるには運営面での知識が不可欠でしたので、「自分には無理」と考えてしまったのです。

——女性が店長を目指すというキャリアモデルが存在していなかったのですね。

砂川 そこで、店長に必要な知識や経験をリストアップし、その習得に向けた年間計画を立案しました。あわせて、お客様である女性と同じ目線を持った経営者が必要であることを、候補者1人ひとりに繰り返し説明しました。そうした取り組みを続けていくうちに、次第に女性店長が増えていきました。

——しっかりと道筋をつけたうえで、必要性を粘り強く説得する。それが女性活躍の秘訣というわけですね。

砂川 女性社員の制服にしても、男女で仕事が分担されていることも、当時はそれが「当たり前」のことでした。固定観念をひっくり返すには根気がいりますが、一旦ひっくり返してしまえば、なぜそうしていたのか不思議に思えるもの。現在は男女とも「総合職」として区別なく働いていて、男性社員でも「店長になるより、ずっと現場でいたい」「仕事だけでなく子育ても頑張りたい」という方も増えていて、男女を問わず自由に働き方を選べるようになっていきます。

● トップの方針と具体的な方法論、そして社員の意識改革が実現のカギ

——労働人口の減少や女性目線の必要性などから、今後も業界を問わず女性の力が求められると思いますが、

容易に実現できない企業も少なくないようです。実践者としてアドバイスをいただけますか？

砂川 これまでの経験から大切だと感じるのは、やはり経営トップが確固たる方針を示すこと。組織としての揺るがぬ方針があってこそ、女性社員は「自分たちも主張していいんだ」「管理職を目指していいんだ」という安心感を抱くことができます。もちろん、トップの意識だけで変わるものではありません。組織の全員が納得して取り組めるよう、女性活躍を推進する必要性や具体策をしっかり可視化することが重要だと思います。

——「トップの強い信念」と「推進部門の明確な戦略」が両輪となって、初めて実現できるのですね。

砂川 あとは社員自身の意識改革も大切です。性別によって自分の可能性を狭めてしまわず、いろんな経験を積んで殻を破ってほしいですね。実際、若い女性社員から「子どもを産みたいけど、キャリアアップも目指したい」との悩みを聞くことがありますが、そんなときは「どちらを選んで、どちらを諦めるとか考えずに、どうすれば両立できるかを一緒に考えましょう」と、4人の子どもの育てた自身の体験も交えて伝えています。

——素敵なエピソードです。今日は参考になるお話ありがとうございました！

Announcement

金秀グループは、まだSDGsという言葉もなかった時期から、「誠実、努力、奉仕」の社訓のもと、ビーチクリーン活動や寄付活動、地元学生を対象とした奨学金制度など、様々な活動を通じて地域社会への貢献を続けてきました。2019年には、社員1人ひとりがSDGsアンバサダーを目指すべく「次世代につなぐSDGs宣言」を発表し、事業活動を通じて持続可能な社会づくりへの貢献を目指しています。詳細については、FAMILY NEWSサイトにて紹介（8月公開予定）しますので、ぜひ、引き続きご覧ください。

社訓 誠実 努力 奉仕 実力 責任

社訓に掲げる「誠実、努力、奉仕」の精神

INNOVATION



Cover Story

アウトドアの楽しみは、 ブームからカルチャーへ

第2次アウトドアブームと言われる昨今、SNSやテレビでも関連する話題に事欠きません。実際に、2020年のオートキャンプ参加人口は約610万人^{*}で、外出自粛のご時世でも前年比約3割減にとどまりました。ブームは今後も続くのか? 行方を占ってみましょう。

遡ること30年、1990年代に興った第1次アウトドアブームは、今とは桁違いの大流行でありながら急激に減衰しました。主な原因は、画一的な遊び方であったと思います。家族や友人とSUVで山、川、海に出かける延長上に、キャンプ、焚き火、バーベキューがあったものの、それだけでは数回で「飽きてしまった」のではないかと。

その点現在は、シーンもスタイルも道具も多様化し、ソロキャンプに癒しを求める人も、リゾートホテルでグランピングを満喫する人も、それぞれに贅沢な時間を味わっています。ハマるポイントが人それぞれであること、これはブームがカルチャーとして根付く兆しではないでしょうか。

^{*} 出典：日本オートキャンプ協会「オートキャンプ白書2021」

FAMILY 通巻406号 2022年7月20日発行(年4回発行)

編集責任者 FAMILY編集委員会 山宿 信也
発行 FUJITSUファミリー会
〒105-7123 東京都港区東新橋1-5-2 富士通(株)内
Copyright 2022 FUJITSUファミリー会 [禁無断転載]

^{*}本誌記事中の各会社名、各種製品名等は、各社の商標または登録商標です。
^{*}本文にある専門家による情報・意見は、必ずしも富士通・編集委員会の見解を反映したものではありません。

会報編集部では、読者の皆様からのご意見をいただきたくアンケート調査を実施いたします。ご協力をお願いします。

